〈調査報告〉

大谷大学編『清沢満之全集』未収録の新出清沢満之著述群について

藤原正寿
西本祐攝

はじめに

昨今の近代仏教思想研究の盛り上がりには目を見張るものがある。それらの研究書、研究論文には大谷大学編『清沢満之全集』（全九巻、岩波書店、二〇〇二―三、以下『全集』と略）が多く参照・引用されている。特に、近年、進展を見せる清沢満之研究において、『全集』は清沢満之の著述を踏まえる際のテキストとして必ずといってよいほど参照・引用されており、『全集』刊行は、その研究推進に大きく寄与していると言えよう。

『全集』編集の中心的役割を担った本学真宗総合研究所（以下、研究所と略）の清沢満之研究班は、一九八一年度の研究所開所から十年を経た、一九九一年度に発足している。一九九三年度に当時の研究代表者であった安冨信哉教授によって『全集』刊行への本格的な提言がなされて以降、二〇〇二年四月の響流館開館に先んじて同年二月に響流館内の研究所に実務の場を移すまでの十年間を含め、地道な文献収集と翻刻・校正、掲載基準に関する検討が重ねられた。刊行

に際しては編集委員十一名、編集実務担当教員二十七名、研究補助員四名という全学的な体制がとられたが、刊行が実現したのはそれらのメンバーのみではなく、研究班発足当時からの研究活動に携わってきた研究員、研究補助員と研究補助者（数十名）の尽力によるものであることを銘記しておきたい。『全集』は、二〇〇二年一一月二八日に第一巻が刊行され、二〇〇三年七月二九日に第九巻の刊行を終えている。

さて、二〇一四年度より活動を再開した研究所の清沢満之研究班は、清沢満之研究のさらなる充実を目指し、『全集』に収録されていない新出の清沢満之著述群を収録した『全集』別巻の刊行を一つの目的としている。その刊行に向けては、本学編『全集』が有する文献掲載基準や編集方針などの特質を確認しておく必要がある。そのために、本報告では『全集』編集がどのようになされ、編集方針が定められたのか、まずはその経緯を確認しておくこととしたい。[1]

一

本学研究所に正式に清沢満之研究班が立ち上げられたのは一九九一年度である（研究代表者神戸和麿教授）。当初は清沢満之の「信仰」「思想」「実践」「資料（清沢満之に関する研究）」を四つの柱とする研究班であった。まだ、この段階では『全集』の編纂には言及されていない。研究班にとって一つの転機となるのは、安富信哉が研究代表者となる一九九三年度であった。安富は、清沢満之に関する研究が「思想背景についての厳密な資料検討」や「十分な思想的読み」を通してなされていないこと、そして、『清沢満之全集』（法藏館、以下、法藏館『全集』と略）が絶版になっており、研究者のおかれる状況が満足できるものではないこと、これらの点から、多方面からの清沢研究に耐えうる基礎資料を提供することが必要であり、それは満之を学祖と仰ぐ本学の使命であると述べている（『所報』第二九号・四頁）。つまり、満之の思想的課題を究明していくには、既存の研究成果を収集して、それについて論じるような研究では、当然不十分であり、思想的背景の研究が不可欠であることと、そのために信頼できるテキストの作成が急務であることを指摘している。

これらの指摘を受けて、『全集』刊行が大谷大学における喫緊の課題であることに言及されたのは一九九五年度であった。『真宗総合研究所研究紀要』（以下、『研究紀要』と略）No. 13（一九九六年三月三十一日発行）に掲載された「清沢満之『精神界』所載論文校訂集」（代表者　安富信哉）では、『精神界』（明治三十四年～明治三十六年）を底本、法藏館『全集』を対校本とする校訂の結果が報告されている。この校訂作業では、「精神主義」（『精神界』創刊号巻頭掲載論文）「他力の救済」（『精神界』第三巻・第五号掲載）「咯血したる肺病人にあたふるの書」（『精神界』第三巻・第四号）「宗教的道徳（俗諦）と普通道徳との交渉」（『精神界』第三巻・第五号）「我信念」（『精神界』第三巻・第六号）の五篇が対象となっている。その中で「精神主義」については清濁点も含めると、九十六箇所に及ぶ相違が見られた。文字の変更や文章の改編は十七ヶ所である。その他の論稿でも同様の問題点があることが確認された。特に「咯血したる肺病人にあたふるの書」については二十八文字の脱文が確認されている。また、法藏館『全集』は原文を改める改訂基準が不明瞭であるなど種々の問題が指摘され、研究に堪えうるテキストとは言い得ないことが確認されている。[2]

法藏館『全集』の問題点を指摘する研究班の活動と呼応するかのように、一九九五年、久木幸男著『検証　清沢満之批判』（法藏館）において、法藏館『全集』未収録の二三篇の文献について言及がなされた。氏の著書の目的は、清沢満之に対する批判を検証し応答することにあり、未収録文献について詳しく論じることを目的とはしていない。しかし、本学の『全集』編集・刊行上、極めて重要な指摘であり、一九九六年十月二十二日、久木幸男氏をお招きしての研究会を開催している。[3]この講演で、久木氏がすでに入手している二三篇に及ぶ未収録文献の他にも、法藏館『全集』未収録の文献があると報告された（当時）。[4]

法藏館『全集』の問題、久木氏の指摘を踏まえ、『全集』編集の充実を期すため、一九九八年度からは、

①全集編集の研究

a．全集の基本構想案の作成

b．電子出版に関する研究

②資料の調査研究

a．西方寺を中心とする資料の調査および整理

b．資料の対校作業

（『所報』三六号・四頁）

の二点を柱とし、『全集』編集作業が進められている。特に、自筆原稿の調査を最優先に進め、西方寺（愛知県碧南市）の全面協力を得て同寺所蔵の自筆原稿を確認する作業が本格的に始められている。この調査によって法藏館『全集』に収録されている随想・日記・書簡で西方寺所蔵ではない資料があること、新たな未公開資料として満之の大学時代の自筆ノート数十冊が残されていることが明らかとなっている。[5] 以降、『全集』は「底本を明確にし、忠実な翻刻を目指す。」という編集方針が示され、西方寺所蔵自筆原稿の影印（総コマ数７０００枚、36枚撮りフィルム２１０本）をもとに、編集作業が進められていく。「随筆」「日記」はもとより、「ノート類」は未公開の膨大な文献が発見され、清沢研究の新たな一面を開くとともに、当時の帝国大学の授業について知ることができる貴重な文献であると指摘されている（『所報』三八号・一六頁）。以降、編集委員会が決定した「編集方針」に従って、『全集』に収録する満之の全著述について依拠本（底本を『全集』では依拠本と呼称する）確定の作業が始められた。依拠本は自筆原稿と掲載雑誌が基本であるが、両方存在する場合、いずれを満之が確定稿と考えていたか、あるいはこれらがいずれも未入手の文献については、既刊全集の三巻本『清沢全集』（無我山房）、六巻本『清沢満之全集』（有光社）、八巻本法藏館『全集』のいずれが最も原本に近いと思われるかで依拠本を確定する等の作業を全ての満之の著述について行った。この作業が最も難行を極めたといってよい。表記については依拠本に忠実に翻刻すること、注、解題、解説を付すこととなった。[6]

これらの表記等に関する「編集方針」で明文化し得ることについては、『全集』各巻の「凡例」に示されている。「凡例」に示されるように、『全集』は満之自身の著述に絞って掲載することが決定した。これによって満之の大学時代のノ

ート類が『全集』には収録されないこととなった。それらは、満之自身の思索に基づく著述とは言えないという判断で掲載が見送られている。しかしながら、大学時代のノートについてはその一部が法藏館『全集』に掲載されているため、同様の箇所に限定し『全集』に掲載することが決定する。

研究班としては『全集』第九巻刊行後に、大学時代のノートを続けて編集刊行するという共通の理解をもっていたが、その刊行は現在のところ実現していない。従って、現在も未公開のものが多数残されている。[7]

『全集』には、久木氏から提供された二三篇の新資料の他、研究班で収集した文献を併せ、九〇篇以上に及ぶ新資料を収録している。[8] 長く法藏館『全集』に基づいて清沢満之の研究はなされてきたが、すでに指摘したように、法藏館『全集』にはテキストとして種々の看過できない問題点が存在する。よって従来の研究成果は、特定の事柄に限らずその全てが、『全集』掲載の全文献に基づいて再検証されねばならないこととなった。特に、自筆原稿や満之在世当時に出版された書籍、雑誌を依拠本として翻刻された文献、さらに新資料等は、これまでの研究成果を再検証する際に新たな視点を提供するものとしてあると言えよう。実際に『全集』刊行後、新たに掲載された文献や自筆原稿に依拠した文献を踏まえて、従来の見解を問い直す研究がなされている。

しかし、『全集』はすでにその刊行時、いわゆる『清沢満之全集』の完成版ではなく、その当時の限界性をもつ『全集』であることが、全巻を通しての編集実務に携わった全員に自覚されていた。その確認の上で、次のように二〇〇三年度の「研究成果報告」は結ばれている。

また、今後清沢と交流のあった人々の著述の研究、さらに清沢研究の進展につれて、再度、基礎資料の拡充が求められることもあるであろう。その際、本研究の収集した資料や研究成果が活用されるならば幸いである。

（『所報』第四五号三頁）

『全集』では、執筆情報はあるが未発見の文献や、自筆原稿や掲載雑誌を収集できず、既刊の全集を依拠本とせざる

を得なかった文献が残されている。これらについては「解題」で既刊全集がもとにした雑誌等の情報について確認できたことを示すにとどまっている。また、『全集』が満之自身の著述を掲載するという方針で編集されたことにより一つの問題が生じている。それは西方寺所蔵の満之自筆ノートで、『全集』に未収録となった文献の存在である。未収録の理由は、満之が他人の講義・著述などを記録したものは収録しないという方針による。未収録文献は「清沢満之の思想形成を探る資料としての価値」の他に、「帝国大学でどのような教育をなされたのかという、日本近代教育史の資料となる」という意義をもつ。『全集』刊行後、大学時代のノートについては翻刻作業が継続されたが、二〇〇七年度に諸事情で休止された。さらには、後述するが、『全集』刊行を終えようとする頃に情報が寄せられ、第九巻の刊行までに編集が間に合わず収録できなかった文献も存在する。本論冒頭にも述べたように、『全集』刊行から十五年を経て、清沢満之研究は新たな展開をみせている。その中で、『全集』未収録の満之の著述が確認されたといういくつかの情報が寄せられてきた。研究所では、二〇一四年度から、再度、清沢満之研究班を立ち上げ、『全集』未収録文献の収集・翻刻、編集・刊行に向けた活動を開始することとなった。

その活動の中で、三ヶ年にわたり、長徳寺、求道会館、西方寺、唯法寺、同志社大学人文科学研究所にて調査を行った。以下、その調査報告、収集文献の情報と文献群についての若干の考察を加えておくこととする。

二

■ 調査報告

1、清沢満之自筆文献、及び満之講義の筆録等

① 長徳寺所蔵文献

新潟県新発田市にある真宗大谷派長徳寺に所蔵されている満之講義の筆録、満之自筆書簡の調査を行った。これらの

文献は真宗大谷派教学研究所（以下、教学研究所と略）が刊行している『関根仁応日誌』（全八巻）の調査の際に確認されていたもので、藤原正寿研究員によってもたらされた情報である。本研究では二〇一四年六月二七日（金）二八日（土）に予備調査を行い、同年七月一一日（金）から一三日（日）に撮影を行った。撮影に際しては、すでに長徳寺蔵の資料を整理していた教学研究所のご協力をいただいた。書簡はすでに教学研究所が撮影済みであったため、本研究班では「哲学史」「近代史」「今世哲学史」「倫理学史」「近世倫理学史」の講義録、五文献の撮影を行った。内容は、従来の『全集』に収録済みの講義録とも、後述する住田智見筆録の満之講義録とも異なるものであり、新出の講義録であることを確認している。書簡（一〇篇）は『関根仁応日誌』（第八巻）に公開されている。

② 求道会館所蔵文献

東京都文京区本郷にある求道会館に所蔵されている、清沢満之自筆書簡の調査を行った。これは、岩田文昭大阪教育大学教授を中心に行われた科学研究費補助金研究「青年知識人の自己形成と宗教―近角常観とその時代」において調査研究がなされ、所蔵情報が公開された文献である。

二〇一五年三月一六日に求道会館を会場に開催された親鸞仏教センター主催の「第一回　清沢満之研究交流会」に西本が発表者として参加するのに併せて、調査を行った。調査では求道会館の近角真一氏のご了承を得て、また、近角常観研究に際し、所蔵資料の整理調査を行っていた岩田文昭氏、碧海寿広龍谷大学アジア仏教文化研究センター研究員のご協力、さらには名和達宣親鸞仏教センター研究員（当時）の仲介をいただいた。岩田氏らの調査によって当該書簡を撮影済みであったため、その写真データを譲り受けた。清沢満之自筆書簡一通「原肱千宛（一九〇一（明治三四）年六月二四日）」、清沢満之宛書簡「清沢満之宛　鈴木精三書簡」「清沢満之宛　古田清子書簡」「清沢満之宛　伏見研明書簡」「清沢満之宛　済辺初相書簡」「清沢満之宛　南条文雄書簡」「清沢満之、近角常観宛封筒」「清沢満之、斎藤唯信宛　近角常観書簡」「清沢満之宛　正木新書簡」、他、「山田喜六宛　清沢厳照他書簡」の翻刻を行った。

③ 西方寺所蔵文献

愛知県碧南市にある真宗大谷派西方寺所蔵の清沢満之自筆書簡の調査を行った。西方寺は満之が入寺した寺院であり、従来より本研究班に多大なご協力をいただいている。既に述べたように『全集』刊行に際して清沢満之自筆原稿を提供いただいている。『全集』未収録の書簡が確認されたという情報をいただき、二〇一五年九月二日に所蔵資料の予備調査を行った。研究班でも『全集』未収録の文献であることを確認し、二〇一六年一一月一一日に本調査を行い、清沢自筆書簡四点と、句仏上人の清沢宛書簡三点等、『全集』未収録文献の撮影を行った。以下は撮影した文献である。清沢満之自筆書簡四通「原肱千宛（明治三四年六月二四日付）」「清沢やす宛（明治二二年七月二二日付）」「清沢やす宛（明治二二年八月一〇日付）」「清沢厳照・法賢宛（五月一八日付）」清沢満之宛書簡四通「清沢やす書簡草案」「大谷光演書簡（二月二〇日付）」「大谷光演書簡（六月九日付）」「大谷光演書簡（一一月一二日付）」、他、清沢満之他三名集合写真。西方寺所蔵文献の調査については名畑直日児嘱託研究員（教学研究所所員）にご尽力いただいた。

④ 唯法寺所蔵文献

愛知県西尾市にある占部観順氏自坊の真宗大谷派唯法寺に所蔵されている清沢満之自筆文献等の資料調査を二〇一七年二月二〇日に実施した。唯法寺には、二〇〇六年一一月九日に清沢満之の『臘扇記注釈』刊行（二〇〇八年）に向けた調査を行った際にもご協力をいただき、占部観順氏、占部公順氏、占部傑氏の関係、生没年、行実等を教えていただくとともに、清沢満之自筆書簡の所蔵情報を提供いただいていた。これについては畑辺初代氏が「近代大谷派教団史に於ける占部観順異安心事件の位置について」『所報』（第二二号・二〇頁、一九八九年）に報告しているように、かつて畑辺氏が唯法寺所蔵文献を調査した際に発見したものである。現在、唯法寺では清沢満之自筆書簡を特定していない状況であったため、藤原、西本、荒金の三名で、同寺所蔵の諸資料の調査を行った。今回の調査範囲内では、明確に満之の自筆書簡と確認できる資料はなかった。この文献の他に、占部観順筆の清沢満之宛書簡（未開封、未郵送）を発見したため、

同寺住職の立ち会いのもと開封し、内容確認と撮影を行った。

2、刊行物掲載文献

刊行物に掲載された満之の論稿については、『全集』刊行時に執筆情報はあるものの現存を確認できなかった文献がある。

① 論文名不明（『碧海郡教育会誌』に掲載か、一八九八年四月九日）

九日

朝晴　漸悪　後三時来風雨　本日碧海郡教育会ニ送ルヘキ漫録ヲ艸ス　簡ニシテ意ヲ尽サス（時日切迫止ムヲ得サルナリ）殆ント独断的ニ要点ヲ略言セルノミ

夜右発送ス碧海郡教育会長村井高正氏宛　（「徒然雑誌　第一号」『全集』第八巻・三〇八頁）との記述から。

② 「宗義の研究」（『二諦教報』、一八九八年八月二九日）

二十九日（月）七、十三、　本晩ヨリ旧盆

晴　昨来二諦教報ニ致スヘキ原稿（宗義の研究）ヲ艸シ発送シ了ル　（「臘扇記　第一号」『全集』第八巻・三四一頁）との記述から。

③ 「一念」（『徳風雑誌』小山村敬専寺三為会、一八九八年九月四日）

四日（日）十九日

㋐野々山照界氏小山三為会大会演説筆記ヲ徳風／雑誌ニ投与云々

（「臘扇記　第一号」『全集』第八巻・三四四頁）との記述から。

④ 論文名不明（草間〔関根〕仁応宛書簡、一八九八年一〇月一〇日）

『二諦教報』上の臘扇は、小生に候間（次号には清沢と署名可致候）、御間隙に該紙上宗義研究の論文御覧置被下度候。不備。

（『全集』第九巻・一七七頁）との記述から。②「宗義の研究」と同一か。

⑤「啓成の源基」（『京都府教育会雑誌』、『教育時論』二一二、一八九一年三月五日に、京都府教育会総集会（二月八日）での徳永満之演説「啓成の源基」の記事有り）

これらの中で⑤を二〇一四年七月三一日に西本が同志社大学人文科学研究所にて入手した。それ以外は未収集である。また、近年の近代仏教史研究の進展によって、『全集』未掲載の論稿が研究者によって見出され、紹介されている。二〇一六年六月四日の近代日本仏教史研究会における星野靖二氏（國學院大學）の発表「『経世博議』と中西牛郎」では、中西牛郎が主筆を務めた『経世博議』に満之の論稿四篇（「学問と宗教との関係」「転化の観念」「調和論」「精神的三要」）が掲載されており、三篇が『全集』未収録であると報告された。中西は、清沢満之が活躍する以前の明治仏教界を牽引した人物である。また、一時期、渥美契縁の要請により真宗大谷派が刊行する『常葉』の主筆もつとめており、満之等による宗門改革運動を批判した人物としても知られている。しかしながら、これまで満之と中西の直接的な関係については不明な点も多く、満之の日記・書簡や周囲の人物による追憶等に中西の名前や『経世博議』の書名は見えるものの、満之が『経世博議』に論稿を寄せたという明確な記述はなく、知られていなかった。『全集』別巻刊行に向けては、『経世博議』に掲載された文献についてはもちろんのこと、解題・解説の作成に向けても、中西と『経世博議』について確かめることが不可欠であり、二〇一七年二月二三日に星野氏をお招きして研究会を開催した。詳しくは本『研究紀要』所収の星野靖二「「新仏教」のゆくえ――中西牛郎を焦点として」をご参照頂きたい。星野氏には『経世博議』全号のデータベースを提供いただいた。

親鸞仏教センター研究員の長谷川琢哉氏が「『宗教哲学骸骨』再考――「前期」清沢満之における哲学と信仰――」

『現代と親鸞』第三四号、二〇一六年一二月、親鸞仏教センター）で、「仏教興起」『全集』第六巻（一八九八年六月一五日発行『布教文庫第十二編　名家仏教演説集』（鴻盟社）を依拠本として掲載）について、一八九二年五月一五日の「三校連合仏教大演説会」における演説の筆録であり、同年六月発行の『伝道会雑誌』第五巻第六号に掲載されたものが初出文献である可能性が高いことを報告している。『全集』編集方針では、満之存命中に満之が最終確定稿としたと思われる文献を依拠本にすることとなっている。そのため『全集』収録の依拠本に変更はないが、初出と考えられる文献が見出されたことで、「文学士　徳永満之」と記名される問題と執筆年次の確定等にも意義をもつ報告である。

これらの文献群以外に、特筆すべきこととして、山形県長井市法讃寺蔵の清沢満之自筆書簡に触れておきたい。かつて、松原祐善本学元学長が「清沢先生と同朋会運動」『中道』（第八〇号、清沢満之臘扇忌記念号三六頁、中道社、昭和四四年六月一日）において、法讃寺所蔵の清沢満之自筆書簡をもとに、満之における宗門革新運動の意義を論じており、同寺に自筆書簡が所蔵されていることは明らかにされていた。二〇一六年一〇月一〇日に刊行された森岡清美著『真宗大谷派の革新運動―白川党・井上豊忠のライフヒストリー』（吉川弘文館）では、井上豊忠宛清沢満之自筆書簡（法讃寺蔵）に基づく考察がなされている。『全集』は法藏館『全集』を依拠本として掲載しており、自筆原稿は未確認であった。森岡著では法藏館『全集』の空白部分も文字起こしがなされており、文字が相違する箇所も見られる。森岡氏に当該書簡の撮影データのご提供をお願いし、ご快諾いただき譲りうけた。氏によれば『全集』未収録の書簡もあるとのことであるが、収集が研究班最終年度末であったため、その翻刻、精査はこれからの課題となっている。なお、名和達宣教学研究所研究員には法讃寺所蔵情報をご提供いただき、森岡氏との仲介をしていただいた。

以上、新出の清沢満之著述群は、百武涼子、工藤克洋両氏が翻刻、校正を行っている。

先にも触れたが、『全集』刊行後、二〇〇七年度までの研究班の活動においても、『全集』未収録の新出清沢満之著述が収集・翻刻されている。それについても記しておきたい。

① 祐誓寺蔵住田智見筆録徳永満之講義

愛知県名古屋市にある真宗大谷派祐誓寺所蔵の住田智見筆録の満之講義ノート「宗教哲学」「古代哲学史」「近世哲学史」「論理学講義」「心理学講義」五冊が二〇〇三年二月一四日と同年五月九日の調査時に確認された。借用をお願いし、同年六月四日に開催された『全集』編纂委員会にて今後の出版・研究を検討した資料である。同年七月二四日に研究所内で撮影を行った。「宗教哲学」は、『全集』第一巻に同朋大学仏教文化研究所所蔵のマイクロフィルムを依拠本として収録済みである。他の四文献も『全集』への収録基準を充たしていることが確認されている。「古代哲学史」「近世哲学史」は、『全集』第五巻口絵写真として掲載し、同巻「解題」（四三五頁）でも言及しており、文献の存在は公表済みである。

三

■収集文献の情報

清沢満之研究班では『全集』刊行後、新たに満之著述と認めることができる三八点の文献を確認している（二〇一七年三月末現在）。それらについて、『全集』掲載基準を満たすか否かの精査を行った。その結果、三三文献が掲載基準を満たすことを確認しており、その内容検討を順次始めている。概要は以下のとおり。

別表Ⅰ

通番	題	記名	依拠本	所蔵	依拠本による執筆年情報	掲載欄	備考
1	「哲学史講義」	「愛知県　住田智見」「文学士　徳永満之氏述」「住田智見記」	住田智見筆録	祐誓寺蔵	1889（明治22）年10月1日～1890（明治23）年6月27日か		外題に「古代哲学史」とある講義ノートに収録。真宗大学寮における講義録。

2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
「中古哲学史」	「近世哲学史」	「心理学講義」	「論理学」	「哲学史」	「近代史」	「今世哲学史」	「倫理学史」	「近世倫理学史」	The Skeleton of A Philoso-phy of Religion.（草稿）
「文学士　徳永満之述」「本科第二年級　住田智見録」	「住田智見　録」「文学士徳永満之口授」	「専門別科第三年住田智見　記」「京都尋常中学校長　文学士述」	「於真宗大学寮専門別科　住田智見記」「文学士　徳永氏述」	徳永満之文学士述	徳永師	徳永師			
住田智見筆録	住田智見筆録	住田智見筆録	住田智見筆録	関根仁応筆録	関根仁応筆録	関根仁応筆録	関根仁応筆録	関根仁応筆録	清沢満之自筆原稿
祐誓寺蔵	祐誓寺蔵	祐誓寺蔵	祐誓寺蔵	長徳寺蔵	長徳寺蔵	長徳寺蔵	長徳寺蔵	長徳寺蔵	西方寺蔵
1890（明治23）年9月20日～1891（明治24）年1月27日	1891（明治24）年2月上旬～1892（明治25）年6月29日	1889（明治22）年5月14日～1889（明治22）年12月14日	1888（明治21）年10月23日～1889（明治22）年4月27日	なし	なし	なし	1893（明治26）年1月11日～同年内に講了		
外題に「古代哲学史」とある講義ノートに収録。真宗大学寮における講義録。	真宗大学寮における講義録。	真宗大学寮における講義録。専門別科第3年対象の講義か。	外題に「論理学講義」とある講義ノートに収録。十六回の講義。真宗大学寮における講義録。専門別科第3年対象の講義か。	真宗大学寮における講義録。	真宗大学寮における講義録。	真宗大学寮における講義録。	真宗大学寮における講義録。専門本科第2年対象の講義か。	満之の真宗大学寮における講義録。	『全集』では掲載が見送られた。野口善四郎の訳を校閲し、意を尽くさない印象をもっていた満之が自ら訳した直したことを、野口の「序文」と稲葉昌丸の追憶（法藏館『全集』第三巻・701頁）が伝

	12	13	14	15	16	17	18
	「啓成ノ原基（演説筆記）」	「学問ト宗教トノ関係」	「転化の観念」	「精神的三要」	清沢やす宛「書簡」	清沢やす宛「書簡」	原肱千宛「書簡」
	文学士　徳永満之	徳永満之	徳永満之	徳永満之	「徳永満之」	「徳永満之」	「清沢満之」「満之」
	『京都教育会雑誌』第63号	『経世博議』第1号	『経世博議』第6号、第8号	『経世博議』第24号	清沢満之自筆原稿	清沢満之自筆原稿	清沢満之自筆原稿
	同志社大学人文科学研究所蔵	清沢満之研究蔵（星野靖二氏提供）	清沢満之研究蔵（星野靖二氏提供）	清沢満之研究蔵（星野靖二氏提供）	西方寺蔵	西方寺蔵	西方寺蔵
	1891（明治24）年3月28日発行	1890（明治23）年11月20日発行	1891（明治24）年4月28日発行 1891（明治24）年8月25日発行	1892（明治25）年12月21日発行	1899（明治22）年7月22日	1899（明治22）年8月10日	1901（明治34）年6月24日
	論説	寄書	論説	特別寄書			
	えているが、この“Skeleton”自筆原稿は、その満之訳である可能性が高い極めて重要な文献。満之による翻訳の過程を知ることができる文献か。	満之の講演の筆記。「啓成」とは「教育」、「原基」とは源、基礎のこと。当時、真宗大学寮で教鞭をとる満之の教育思想を窺うことができる文献。	満之が真宗大学寮で「宗教哲学」を講じていたころの論稿。『宗教哲学骸骨』第一章「宗教と学問」との関連を窺うことができるか。	満之が真宗大学寮で「宗教哲学」を講じていたころの論稿。『宗教哲学骸骨』第四章「転化論」との関連を窺うことができるか。	消印より明治22年。	消印より明治22年。	消印より明治34年。

19	暁烏敏宛「書簡」	「満之」	『暁烏敏全集』第21巻・244頁	清沢満之研究蔵	1901（明治34）12月19日			〔東京市本郷区森川町一ノ二四一浩々洞暁烏敏宛・愛知県大浜清沢満之より・封・明治三十四年十二月十九日〕とある。『資料清沢満之（資料篇）』「浩々洞と『精神界』」にも収録。
20	原子肱千宛「書簡」	「清沢満之」	清沢満之自筆原稿	求道会館蔵	1902（明治35）年1月8日			消印〔明治〕35年1月10日。
30～21	関根仁応宛「書簡」10通	『関根仁応日誌』第八巻（教学研究所）参照。	『関根仁応日誌』第八巻（教学研究所）	長徳寺蔵	『関根仁応日誌』第八巻（教学研究所）参照			
31	赤堀孝太郎宛「書簡」	「清沢満之」	清沢満之自筆原稿	清沢満之研究班に影印を所蔵				年不明。依拠本に「六月廿六日」（書簡本文）、「三月十七日」（封筒裏）とある。
32	清川円誠宛「書簡」	「満之」	清沢満之自筆原稿	清沢満之研究班に影印を所蔵	3月11日			年不明。
33	清沢厳照、法賢宛「書簡」	「満之」	清沢満之自筆原稿	西方寺蔵	5月18日			年不明。
34	「理ト信」		清沢満之自筆原稿	大谷大学図書館蔵				色紙に表装されたもの。『全集』第2巻253頁に法藏館『全集』第4巻を依拠本として収録。
35	「〔仏〕」		清沢満之自筆原稿	大谷大学図書館蔵				『全集』第2巻219頁に法藏館『全集』第3巻を依拠本として収録。
36	「調和論」	徳永満之	『経世博議』第14号	清沢満之研究蔵（星野靖二氏提供）	1892（明治25）年2月20日発行	論説		『全集』第2巻33頁所収の「〔調和論〕」と同内容であるが、加筆修正が見られる。『全集』は自筆原稿を依拠本としているが、解題では法藏館『全集』を踏襲して執筆

						時期を「明治二十八年一月」と記す。満之が真宗大学寮で「宗教哲学」を講じていたころの論稿。『宗教哲学骸骨』第二章「有限無限」他との関連を窺うことができるか。
37	大学第四年度ノート「心」		清沢満之自筆原稿	西方寺蔵		『全集』第4巻161頁に法藏館『全集』第1巻を依拠本として収録。
38	浩々洞宛「書簡」	「清沢満之」「臘扇」	清沢満之自筆原稿	清沢満之研究班に影印を所蔵	1903（明治36）年1月2日。	『全集』第9巻299頁に法藏館『全集』第8巻を依拠本として収録。「明治癸卯元旦」「一月二日」

これらの中で、1から33までは新出文献であり、掲載基準を充たすものと考えられる。34～38までは『全集』収録済み文献の自筆原稿である。

満之が真宗大学寮で「西洋哲学史」と「宗教哲学」を講じたことは従来の研究で知られている。しかし、住田、関根両氏の筆録によって、それら以外の講義も行っていたことが確認されよう。また、従来公開されている西洋哲学史の講義では語られていない時期の哲学者についても論じられていると考えられる。満之の思想研究の面についてだけではなく、教育者としての側面にも重要な意義をもつ文献であると考えられる。“The Skeleton of A Philosophy of Religion.”（草稿）は、『宗教哲学骸骨』英訳の際、野口善四郎の訳を満之が訳し直したと、野口序文と稲葉昌丸の追憶に伝えられている。この度、その満之訳の可能性がある文献を西方寺蔵文献群の中に確認した。満之による翻訳過程を知ることができるとともに、満之における宗教哲学を解明する上でも貴重な文献である。さらに「啓成の原基」は満之の教育論、『経世博議』掲載の文献は宗教哲学に関する論稿であることを確認できる。書簡群は満之の生涯の事跡において不明な時期の情報を提供するとともに、家族、友人等との交流の様子を伝える貴重な文献である。

おわりに

以上、清沢満之研究班で収集した新出清沢満之著述の収集状況について研究班の活動を追いながら述べてきた。これらは、所蔵情報をご提供いただいた寺院、研究者、さらには調査をご快諾いただいた寺院、収集文献をご提供いただいた研究者の方々のご協力によって収集することができた文献群である。本学編の『全集』刊行に際しても、ここにはとてもその全てを詳述はできないが、久木氏以外の研究者からも清沢満之著述の情報を提供いただき、掲載に至った文献が数多くある。現在収集している文献のうち、森岡氏提供の文献を除いては二〇一七年三月までに翻刻を終えている。これらの文献はご協力いただいている寺院、研究者の願いに応えていくということと、さらには今後の清沢満之研究の進展に向けてその基礎資料の充実をはかるうえでも必ず刊行されねばならない。それは清沢満之を学祖と仰ぎ、その「真宗大学開校の辞」に建学の精神を確かめる本学の使命であると言えよう。

註

1　『全集』編集の経緯は、折々の『真宗総合研究所研究所報』（以下、『所報』と略）誌上に報告されており、さらには、西本祐攝「大谷大学編『清沢満之全集』編纂の背景と課題」（『現代と親鸞』第三三号、親鸞仏教センター、二〇一六年六月）に紹介されているので詳しくはそちらも参照いただきたい。

2　この校訂の際に使用された法藏館『全集』が、初版か別の版かが明記されていない。法藏館『全集』は版によって句読点等の欠字もあるので、この作業では十分ではないのだが、このような営みが行われた。この段階で明らかになっている点は『研究紀要』№13で公表されている。さらに「『精神界』それ自体も、句読点の欠落や誤植など資料として十分に検討されなければならない問題があることが確認された」（『研究紀要』№13・九四頁）と指摘されている。これによって『精神界』に限らず他の文献掲載雑誌についても、その原本を収集する調査が進められていく。その際、既刊全集の文献末に記載されている情報が多くの文献収集

の際の手掛かりとなった。

3　同日十七時から、大谷大学博綜館五階第五会議室に於いて、研究会テーマ「清沢全集編纂に向けて」、講題「近代における仏教研究の方法論の研究―清沢満之の地位と基礎資料の検討―」とする研究会が行われている。

4　久木氏が収集した文献は法藏館『全集』の「補遺」として出版される計画があった。久木氏によれば、一九八八年末頃から計画され、一九九〇年初めには再校まで進み、同年『日本歴史』四月号に「『清沢満之全集　補遺』一万二千円」という広告が出される。しかし、法藏館『全集』の問題（第五巻所収、「平沼専蔵」論説の用語）が、「部落差別と宗教」研究会で指摘され、法藏館『全集』は絶版、「補遺」刊行も中止となる。この「平沼専蔵」論説とは、「平沼専蔵と本願寺法主」というタイトルの、安藤正純氏による論稿を指す。満之による論稿ではないが、法藏館『全集』に収録されていることで、『清沢満之全集』における差別用語問題として論ぜられることにもなった。差別用語を含む論稿が掲載されていることから、法藏館は絶版という判断を下された。そのことにより「補遺」の刊行も中止となっている。

5　これらの文献の資料保存のためのデジタルデータ化の必要性が指摘されている。また、この年、九七年度からの西方寺における調査で、二千冊以上にのぼる同寺蔵書の整理を終えたと報告されている（『所報』三六号・四頁）。

6　二〇〇三年度の「研究成果報告」に「今回の全集編纂という作業においては、岩波書店の編集部とも協力しながら一字、一画をあいまいにしない徹底した作業に努めた。また恣意的にテクストを構成したり、注、解題を作成することはないよう留意した」（『所報』第四五号三頁）と記されるように、「注」「解題」は、恣意的になることを極力避けるという「編集方針」に添い、特定の個人の研究成果を反映させるような記述はせず、敢えて限定的な情報の提示に留めている。

7　満之の大学時代における文献は、満之独自の思索か、あるいは大学の講義内容を記録したものか、レポート等にまとめたものか等、確定しがたい。その検証は今後の資料公開と研究を待たねばならない。なお、清沢満之研究班が撮影し、十年余りをかけて翻刻・校正したものを活用する形で、『フェノロサ哲学史講義』（監修・解題　池上哲司、大谷大学真宗総合研究所、二〇一三年）、『フェノロサ哲学史講義続』（監修・解題　村山保史、大谷大学真宗総合研究所、二〇一六年）等に『全集』未収録文献のごく一部が公開されている。

8　大谷大学編『全集』に初めて収録された文献をここに挙げる。①「宗教哲学講義〔『教学誌』所載〕」（第一巻）、②「宗教哲学〔真宗大学寮　明治二十四年度講義〕」（第一巻）、③「宗教哲学初稿」の諸篇（第一巻）これは法藏館『全集』では各巻に分散し収録されていた論稿をひとまとまりのものとして収録。法藏館『全集』には収録されていない論稿も多数ある。④「信教の利益」（第

二巻）、⑤「西洋哲学史試稿」末尾「万有学者」末の文、及び「付篇」（第四巻）、⑥「経験世界」（第四巻）、⑦「〔大学第四年度ノート〕」「善悪」末尾の文、⑧「三誓の文」（第六巻）、⑨「生死巌頭」（第六巻）、⑩「快楽」（第六巻）、⑪「覚悟之必要」（第六巻）、⑫「独立の精神」（第六巻）、⑬「人の為め」（第六巻）、⑭「服従の美徳」（第六巻）、⑮「内観主義」（第六巻）、⑯「心浄ければ世界浄し」（第六巻）、⑰「倫理の大本と宗教との関係」（第六巻）、⑱「将来之宗教」（第六巻）、⑲「エピクテタス氏」（第六巻）これは自筆原稿があるが、掲載誌『同志之友』が、満之生前の刊行。⑳「〔他力の救済〕」（第六巻）『精神界』所載の自筆原稿である。特別に収録。㉑「我は此の如く如来を信ず（我信念）」（第六巻）『精神界』所載の自筆原稿である。特別に掲載。㉒『養病対話〔抄〕』（第六巻）、㉓「装束」（第七巻）、㉔「第三高等中学仏教青年会演説」（第七巻）、㉕「第三高等中学校仏教青年会演説」〔『伝道会雑誌』第三編第一号〕」（第七巻）、㉖「第二高等中学校仏教青年会演説」〔『伝道会雑誌』第二十二号〕」（第七巻）、㉗「第三高等中学校仏教青年会創立一周年賀会演説摘要」（第七巻）、㉘「仏教少年会の発会を祝す」（第七巻）、㉙「上棟式を祝す」（第七巻）、㉚「三為の説」（第七巻）、㉛「愛知教育会総集会ニ於ケル文学士清沢満之君演説」（第七巻）、㉜「最勝之快楽」（第七巻）、㉝「宗教と道徳」（第七巻）、㉞「疑を質す」（第七巻）、㉟「法話」（第七巻）、㊱「〔棚尾橋碑文〕」（第九巻）、㊲「聖教抜萃」（第九巻）抜萃典籍名、㊳「無我の真理」（第九巻）、㊴「書簡」諸篇（第九巻）書簡番号四、一二～一五、一九、二三～二五、二九、三三～三七、四〇、五〇、五三、六二、七一～七三、七六、七八、九四、九五、九八～一〇〇、一〇三、一〇八、一一〇、一五八、一六〇、一六五、一八五、二一六、二一七、二五四、二五五、二五七、二七一、二七五、二八九～三〇六

以上六一編の書簡。

【参考資料】

本稿では最後に、これらの文献の中で、「啓成ノ原基（演説筆記）」の全文を掲載しておきたい。この論稿は、一八九一（明治二四）年三月二八日発行の『京都教育会雑誌』第六三号「論説」欄に掲載されたもので、「文学士　徳永満之」の記名がある。同年二月二八日発行『同誌』第六二号「附録」の「明治二十四年京都教育会総集会録事」には「徳永文学士の演説あり了りて」（「附録」二頁）とあり、『同誌』同号「京都教育会総集会傍聴筆記」には「徳永文学士演壇ニ上リテ演説セラル（其ノ演題ハ「啓成ノ根基」ニシテ其筆記ハ来三月ノ雑誌ニ登録スベシ）」（「附録」一九頁）と報告されている。一八九一（明治二四）年二月七、八日に「師範学校講堂」で行われた明治二十四年京都教育会総集会の会期中、二月八日に行われた演説の筆録である。『同誌』六三号の目次には「啓成ノ根基

会員　文学士　徳永満之」とあるが、本文の標題は「啓成ノ原基」である。「啓成」とは「教育」、「原基」とは源、基礎を意味する。当時、真宗大学寮で教鞭をとっていた満之の教育論を窺うことができる文献であると考えられようか。

啓成ノ原基（演説筆記）

会員　文学士　徳永満之

啓成ノ原基ト題シテ教育ノ基ト云フ事ヲ申上ケタイト思ヒマス、一体教育ノ主義ハ注入トカ開発トカ申シテ随分論モ沢山アリマスガ近頃ノ評判デハ注入ハ旧習クサクシテ且圧制ラシク開発ハ新シクシテ且自由ナリト云フヤウナル時勢ト伺ヒマス　果シテサウデアリマス乎、兎に角私ハ教育ノ事ニ関スル主義ヲバ定メテ述ベスシテ直ニ論理トカ原理トカ云フ其一端ヲ申シタイト思ヒマス　啓成ノ原基ト云フ題ハ昨年ノ勅語ニ知能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シトアリシ中ニ就二ノ字ヲ取リマシタノデ此啓成ト云フガ所謂教育ト云フ事ニナラウト存ジマス　此啓成即知能ヲ啓キ徳器ヲ造リ上ゲンニハ一体注入主義ガ良イカ開発主義ガ良イカ教師ノ方カラ持テ行テ生徒ニ与ヘルガ良キカ又ハサウセネバナラヌカ之ニ反シテ生徒ガ知徳ノ性ヲ抱テ居ルカラ只其邪魔物ヲ取除ケテ発達サスルガ宜シキ乎ト云ハヾ真正ノ教育ハ両方揃フテ始メテ出来得ルコトト思ヒマス　只特殊ノ場合ニ於テハ或ハ注入ト見ヘルトキモアリ又啓発ト見ヘル処モアリマシヤウ　シカシ注入ト云ヘハ教師ニ充分貯ヘマシタモノヲ生徒ガ貰フヤウニ見ヘマスガ強チサウデモナク例ヘバ蠟燭ノ火ヲ他ノ蠟燭ヘ移スト同シ事デいくら他ニ点シタレバトテ元ノ火ガ減ルト云フ訳デナイ故ニ啓発トモ見ヘマシヤウ　又火ヲ貰フテ初メテとぼりたるユヘニ注入サレタルヤウニモ見ヘマシヤウ　夫レト同様ニ教育モ強チドチラト限リテ云フコトハ出来マセン　併シ夫レヲ圧制主義トカ自由主義トカ名付ルハ見当ガ違フヤウデス　併シ今強テ啓発上自由ト圧制トノ上ニ聊カ差ノアルト云フハ例ヘバ一ダケヨリ持テ居ラヌモキニ二ヤ三ノ刺撃ヲ与ヘタラバ一ダケノ結果ヨリナクテ跡ノ一二ハ余計ノ力トナル　此余計ノ力ヲ与フルノガ圧制ト云フベキ者ナラン乎　又自由トハこちらニ一ノ力アルニ一ノ刺撃ヲ与ヘテ一ノ結果アルモノヲ云フトセハ自由ト圧制ノ差ハいくらか出来マシヨウ　併シ真ノ啓成ト云フコトニハ決シテ自由モ圧制モナク相当ノ刺衝カアツテ之ニ応ズルノ結果カ顕ハル、ガ真正ノ啓成デアリマス

是カラ啓成ト云フ事ニ及ビマス　偖生徒ノ知徳ヲ啓成スルト云フ事ヲ言ハンニハ生徒ト教師ト両方ノ事ヲ申サネバナラヌモ教師ノ事ハ大体極ツテ居ルトシテ教育ヲ受クル生徒ノ方ノ事ヲ余計申シマシヤウ　サテ生徒ハ果シテ教育ナシ得フル、者カ其知徳ハ啓成スル事ノ出来ヌモノカト云フ事ヲ探ラナケレバナラヌ　若シ啓成サル、モノナレバ何処マデ啓成サル、カ　又其啓成スルト云フ事ハ只夫レ丈ケノ事カ　即チ教育ト云フ事ハ教育ト云ハレテ居ル丈ケデ済ムカ将タ他ノ事ニ連帯シテ居ルカヲ探ルガ必要デアルト思ヒマス

其処デ啓成ノ出来ルカ否ト云フ事ハ大切ノ問題デアリマスガ併シ之ハ別段面倒ヲ掛ケルニモ及ハヌ　啓成ガ出来ヌトセバ我々ノ職分ガナヒ道理デスカラ之ハ出来ル者トナシ置カン　又是迄出来ヌト云フ事ガナイカラ出来ルハ確カナル事実トシテ置キマショウ、シテ其出来ルト云フ訳即チ其元素ヲ探リマショウ、啓成ガ出来ルトスレバ教師ニ啓成セシムル力アリト云フコトト生徒ニ之ニ応スル力アリト云フコトガナケネバナラヌ　教師ノ方ニ啓成スル力アリトスルモ生徒ニ之ヲ受ケ得ル力ナケレバ効ガアリマセン　怜モもやしタル種子ヲ地ニ植ヘルモ萌ヲ出ス事ガナヒト同様デ生徒ノ方ニ啓成サルベキ性質即チ開発性ガ備ハリテ居ラネバナラヌ　此開発性ガ啓成ノ原基トナルモノデアリマス　何トナレバ此性質ガナケレバ教育ジヤノ啓成ジヤノト云フコトハ出来アセンカラデアリマス、其レナレバ故此性質ヲ少シ研究シマスニ先ヅ誰デモ同ジ事ニ此性質ヲ有シテ居ルカト云フノ問題ガ起リマス　誰レデモ同様ニ有ツテ居ルトハ古来ノ説デアリマス　舜モ人ナリ我モ人ナリト云ハヾ各人ノ有スル性質ハ同様ナリト云フモノ、様デス　然ルニ反対ノモノモ数多アリマス　人心ノ異ナルハ面ノ如シト云フハ其心ノ発達モ亦面ノ異ナルヤウニ違フモノト云フコトヲ含ミマシヤウ　又梅檀ハ両葉ヨリ芳シトテ小サキトキカラ神童ノ名ヲ得シモノヤ后世恐ルベシト云フガ如キモノハ幼少ノ時カラ元来開発性ノ異ナル萌シナリト云フノデアリマショウ　又性ニ善悪アリト云ヒ又三品三階アリト云フハ生レ付キ善悪上中下ノ差アリト云フコトデショウ　こんな事ハ聞キ流シニシテ置ケバ夫レ迄ナルモ愈此主義ヲ以テ教育上ニ施スニ於テハ大ニ利害ヲ生ズルコトト思ヒマス　例セバ性ニ三品アルモノトスレバ其性質ヲ考ヘテ教育セナケレバナリマセン、スナハチ此時ハ上下二者ハ教育スルニハ及ハズシテ只中等ノ人物ノミニ教育ノ必要ガアルト云フ論ガ起リマセウ　此ノ如ク開発性ハ人々ニ同様ニアリト云フト、生来不同ナリト云フト両方アレトモ何レガ真正ナリヤト云ハバ不同ト云フガ本統ダト思ヒマス　今之ヲ実際ノ事例ニ徴シマスレバ古来ノ人物ヲ見ルニ英雄豪傑モアレバ又纔ニ一身ヲ立ツル能ハサルモノモアリ　或ハ王公将相ニナルモノモアレバ糊口ニスラ窮スルモノモアリマス　コレデ開発性ノ人毎ニ違フ所アル事ガ知レマシヨウ　又人ノ生レ落チテヨリ漸ク人事ヲ弁ヘルニ至リ尚段々進ム間ニモ開発性ノ違ヒアルコトハ言ハズシテモ知レ得マス　更ニ人身ノ解剖的研究ヨリスルモ開発性ニ大辺ノ違ヒアル事ヲ発見シマス　解剖ニヨリ知徳ノ原タル脳膸ヲ見レバ大ナルト小キトノ差アリ其髄質ノ組織ニ精粗等ノ違ヒガアリマス　精神ノ働ノ依テ起ル処ノ脳膸ニ違フ所アレバ其開発性ハ不同デアルトセネバナラヌ　尚又単ニ理論上ヨリ云ヘバ古来宇宙ニ二ツノモノトシテ同ジト云フモノハナシ　偶マ其同ジト云フモノデモまるで同ジト云フモノハナイト云フ原理ガアリマス、サウスルト以上列ネタル根拠即チ第一口伝ヘニシテ居ル事、第二実際ノ事例、第三人身ノ組織、第四不均同ノ原理ヨリシテ人々ノ開発性ハ不同ナ者ダト論ジマス　果シテサウデアリマスルト古来ノ教育法ニ誤アル事ガ知ラレマス其思ヒ付タル二三ノ場合ヲ挙ゲマシヤウ　先ヅ第一ニハ学業ノ成ルト成ラザルトハ教師ノ良否又ハ学校ノ良否ニ依ルトスルハ間違ヒデス　父兄ナドテモ我子ヲ学校ヤ教師ニ付ケテ発達セヌトキハ教授ノ叮嚀ナラヌ為メトカ仕組ガ良クナイカラト云フモノガ多イ　生

徒ノ結果ヲ見テ学校ヤ教師ノ品評ヲスルハ大ナル間違デアリマス　固ヨリ教師ヤ学校ノ良否モアリマスカ此レヨリハ寧ロ生徒ノ開発性ガ大切デス　生徒ニ開発性ヲ備ヘテ居レバ之ヲ刺撃スレバ必ズ開発スレトモどんなニ教育シテモ開発性ノナキ者ハ成績ガ挙ラズ開発性ノ少ナキモノハ少シヨリ発達シマセヌ

第二ニハ彼モ人ナリ我モ人ナリト云フハ大ナル間違ヒデアリマス　随分此語ハ云フテモ良キ事モアリマスケレトモ兎ニ角此語ヲ唱フルトキハ非常ニ間違ヒヲ来タシマス　昔ノゑらい人ハ楽ニ仕事ヲヤツタカラ我モ同様ヤレヌ事ハナイト云ヒマスレトモ之レ開発性ノ違フテ居ルト云フ事ヲ見ナイ論デアリマス　開発性ニ違ヒガアレバ誰モ彼モ英傑ニナレマセヌ、第三ニハ級を作りて教授ヲヤツテ居ルハ利デアルカ害デアルカト云フコトデスガ初メヨリ同様ニ教育ヲ受ケテ来タカラハ同様ニスルガ当然ト思ヘモシマセウガ之ハ外部ヨリ見タバカリデ其実開発性ガ違フテ居ル以上ハ左様ニハ申サレヌ　開発性ノ違フガ為メ一ヲ聞テ十ヲ知ルモアリ、十ヲ聞テ一ヲ知ルモアリ、一ヲ聞テ一ヲ忘ル、モアリマス　故ニ級ヲ造ルハ害アリト云ハネハナラヌ　本当ノ教育ハ教師ガ生徒一人々々ニ付キ見込ヲ立テ、教授スルガ宜シイ　併シサウスレバ亦他ノ害ガアリマセウ　之ヲうまくやつて行クハ学校教員ノ上手デアリマスガ兎ニ角開発性ノ違フ処アル上ハ少シク考ヘナケレバナリマセン　第四ニ普通教育ニハ加減ヲセネバナリマセン　普通教育ト云ヘバ何デモ蚊デモ知ラネバナラヌト云フコトデアリマスガ何分開発性ガ違フテ居ルカラ科業ノ中ニハ段々其発達ヲ異ニスルモノガアル　即チ甲ノ科ニハ開発シテ乙ノ科ニハ開発セヌト云フ類ノ事ガアル　然レバ之ニ凡テ普通ノ学科ヲ教ユルハ余程むつかしき事デス　併シ普通科ハそんなニ開発性ノ相違アル処マデ深クヤルデナイト云フ事ナケレバ夫レ迄ナルモサウデナクバ注意スベキ事ニシテ今日ノ学校ナドテモ其学科中ニ開発ノ違フ所アルハ歴々トシテ認ムル所デス　故ニ真ノ人物ヲ造ラントセバ其辺ノ加減ヲセネバナラヌ　併シ今日ノ普通教育ハ論ノ上ヨリ出来タルモノデナク古来ノ経験等ニ依テノ事デアリマシヤウカラ其ハ措キマス　此他開発性ノ不同ナルニ付キ論スベキコト沢山アリマセウガ今ハ第五ニ猶一言シマスノハ精神一到何事不成ト云フ事デアリマス、アレハ間違ヒデアリマス　開発性ノ充分完全ナル人ハサウデモアリマセウガ開発性ノ乏シキ人ハサウハ行カヌ　螳螂カかまニ中レバ却テ其身ヲ害スルコトガアリマスガ不相応ノ事ヲセントシテモ出来マセヌ　其処デ開発性ノ人毎ニ相違アリト云フ事ハ最早分リタリトシテ次ニ彼レノ開発性ハどの位ヒ是レノ開発性ハどの位ト云フ尺度ヲ見ル事ハむつかしい事デアリマスケレトモ全ク見ルコトノ出来ナイト云フ訳デモアリマセン　之ヲ知ルニハ結果ニ付テ見ルヨリ外アリマセン　併シ結果ノ上デ開発性ヲ見テハ役ニ立チマセヌ　此ガ却テ宜シイ　ツマリ開発性ノ尺度ハ前以テ知レマセヌユヘ精神一到何事不成彼モ人ナリ我モ人ナリトノ格言ヲ服膺シテ奮励サシマス　此ハ良キ事ナレトモ畢竟手立テヾアリマシテ果シテ真ニ出来上ルト極メル事ハ出来マセン、出来ザルトキハ開発性ノ足ラヌガ為メナル事ヲ悟ラシムルデアリマス

扨之レヨリ開発性ノ尺度ノ違フハどう云フ訳デアルカ其説明ヲセネバ事ガ纏ラズ満足ハ出来マセン　開発性ノ違フ所以ニツキ種々ノ説明カ立チマスガ大別セバ理外ノ説明ト理内ノ説明ト二類アリマス　其理外ノ内ニ有意的ト無意的トヲ分チ無意的ノ内ニ偶然的ト必然的トヲ分チ更ニ大別第二ノ理内ノ内ニ物質的ト精神的ノ区別ヲ為シマシタ　扨テ第一ノ理外有意的説明ハ開発性ノ不同ハ天地主宰ノ神ノ意カラ出タモノデ我々ハ之ヲ知ル事ガ出来ヌト神ノ意志ニ帰シ道理ヲ云ヒマセヌユヘ理外有意的説明ト申ス、第二理外無意的説明ノ中偶然ト必然トニ別レテ開発性ノ事ハ偶然ニ斯クアルノミニテ規則モ理因モナシト云フガ偶然ノ説明ト云フ　然ルニ此事ハ必ズ由テ起ル必然ノ原因アツテノ事ナルモ其原因ハ我々ノ知ル能ハザル処ト云フノガ必然ノ説明デアリマス、即チ命数トカ天命トカ云フノ類カ此内デス

第三道理内物質的ノ説明又ハ形而下ノ説明トデモ申シマセウカ　此説明ハ我知徳ノ開発性ハ父母カラノ遺伝ニ由テ何処迄開発スルト云フ事ガ定マリテアルト云フノデ例令ハ梅ノ種ガ出来レバ之ハ赤梅ニナルカ白梅ニナルカト云フコトハ既ニ種々含ンデ居ルカ如シトスルノデ物質不滅ノ理ニ基キマス、第四ニ理内精神的ノ説明又ハ形而上ノ説明ハ精神不滅ノ道理ニ拠ルノデアリマス　乃チ心ト云フモノハ不朽ニ存シテ居テ元来開発性ヲ備ヘテ居ル故ニ吾人開発ノ上ニ違ヒアルハ其開発性ノ発表ノ多少ニ依ルト云フ　ツマリ心ヲ押ヘテ其中ニ開発ノ性質ガ寓シテ居ルト云フノ説明ニナリマス

こんなニ五通リニ別ケテ申シマシタガ此内どれが良キカト判断ヲセネバ納マリガ付キマセヌ　扨判断ヲ付ケルト理外ノ事ハ真正ノ説明ニハナラヌカラ棄テ、道理内ノ説明ヲ取ラネバナリマセヌ　故ニ神意的、偶然的、必然的ノ説明ハ措キ先ツ物質的、精神的ノ説明ヲ執ラネバナリマセヌ　然ルニ此二ツニ付キテ少シ申サネバナリマセン　物質的ノ説明ニ就キ遺伝ノ説明ハ今日マダ一定シマセヌ

独逸アタリデハ熱心ニヤツテ新規説モ出テ居リマス中ニモワイズマンノ説ガ勢力ヲ占メテ居リマスガ之レトテ臆説ヲ免レマセヌ　又兎ニ角父母アツテ生レルト直チニ開発性ガ備ハルト云ヒマスケレド猶夫レデモ不完全ノ処ガアル様デスカラ是レ丈ケデハ充分ナ説明トハ申サレマセヌ　其処ヲ鳥渡お話シ申シマセウ　親ヨリ子ニ遺伝シ子ヨリ孫ニ遺伝シテ段々相続スル上ニ於テ開発進化ヲ論ズルハ惣体上論ニテ人類ナレバ人類惣体ノ上ニ昔時ハ野蛮デ今日ハ文明ニナリ尚追々進ンデ黄金時代ニ達スト云フ風デ人類ト云フ全体ガ野蛮ヨリ文明ニ進化スルノデ一箇人ニ就テ野蛮人カ文明人ニナルデハナク野蛮人ハ野蛮デ死シ半開人ハ半開デ死スルデアリマス　今日ノ吾々ハ今日ノ有様ニテ死スレバ夫レキリト云フ風デアリマス　我々之レデ満足出来マセウカ　固ヨリ我々ハ死シテモ我々ノ子孫ガゑらいモノニナル夫ハヨヒコトテ大切ナルコトデアリマス　併シ夫レ丈ケデハ満足出来マセヌ　我々ハ我々ノ開発性ヲ子ニ遺伝スレバ足レリ子ヲ生育シタラハ死ンデ仕舞フマデトスレバ子ヲ生育スルガ大目的デ此目的ヲナサヌモノハ不用ノ人間ト云ハネバナラヌ（大笑）　然ルニ我子孫ガエラクナリ日本国ガ駸々ト進歩スルハ良キコトデアリマスガ我ト云フモノガ死スレバ夫レキリ断滅スルト云

フテハ落胆ノ至リデアリマス　固ヨリ理論上ヨリ云ハヾ精神不滅ノ原理ハ動ス可カラサルモノデアリマス　故ニ今精神ノ開発性ニ就キテハ精神的ノ説明カラ行ク方ガ良キワケデス　此説明デハ我ト云フ者ハ不滅ナルモノデ無限ノ働ヲナスベキモノデアル　無限ノ開発性ヲ備ヘテ居ルト云ヒマス、甚タノモシキデハアリマセンカ　故ニ物質的ノ説明ノミデハ望ミ少ナキ生活モ此精神的説明ヲ得レバ甚ダ望ミ多キ生活トナリマス　故ニ精神的ト物質的トノ説明ガ揃フテ始メテ完全ノ説明ト申サネバナラヌ　其処デ開発ノ異ナルハ種々ノ因情ノ為ニ此性質ノ開顕ノ度ノ異ナルニ過ギヌト説明サレマス　其事ヲ精ク知ルニハ人間一生ノ間ノ研究ノミデハ不充分デアリマス　不滅ノ精神ノ過去現在未来ヲ経テ進化スル模様ヲ討究セネバナリマセヌ　夫レハ今ハ略シマスガモウ一ツ精神的ノ説明ニ付テ申スコトハ心ノ研究ヲ今一層余計ニシタラバ良カラウト思ヒマス　今日学術上ノ進歩デ物質上ノ探求ハ至レルモ心ノ方ガ甚欠ケテ居リマス　人ト云フモノハ物質計リデ出来テ居ラヌト云フ事ハ誰モ知ル所デ物質ト心ト両方デ成テ居リマス以上ハ此両者ヲソロヘテ研究セネバナリマセヌ　此ニ付テ精シク述ベタイト思ヒマスケレトモ永クナリマスカラ極簡短ニ略述シマス　彼ノ物質ヲ研究スル化学デハ元素ガ六七十アリトシ其ヨリ万物ガ出来テ居ルト説キマス　扨其ノ原素ガ六十七十ト云フハ永久ニ動カヌ説カト云フニ左ハナクテ既ニ一原素ノ説モアリマス　其元カ一類デアルト云ハヾ原素ノ開発性ハ元ハ同一デアルト云フノ論ガ出マセウ　然ルニ元ノ一類ノ原素ヲ物質的ト極ムルハ匆卒デアリマス　物質的トデモ精神的トデモ云フテモヨイワケ非物非心ノモノデアルト云フタラ最モ宜シウ思ハレマス　全体物心ノ両者ハ別レタルモノデナイト思ヒマス　今日ノ理学ハ有形ニテ実験ノ出来ルモノ、ミヲ確実トシマスガ、ナルホド我々ノ五官ニ接シテ実験ノ出来ルハ結構デアリマス　併シ化学上ノ原素ハ目ニモ視ヘズ手ニモ触レルコト出来マセン　又物理学デ云フ光線ヤ「エレキ」ノ為ニ必要ナル「イーサー」トカ「エーテル」トカ云フモノモ同様ニテ見ルコトモデキズツカムコトモ出来マセン、サウシテ見レハ物理化学者ノ基本トシマスルモノハ有形デハナク無形デアリマス　無形デアリマスレバ精神ト同様ナ者デアリマス　語ヲ換ヘテ云ヘハ精神ハ無形ナモノ物質ノ元素等ハ無形ナ者ナレバ同一体ガ或ハ物質的ノ性質ヲ顕シ或ハ精神的ノ作用ヲ起スト云フテ宜シウ思ハレマス　斯ノ如ク異ナル顕現ノ所以ハドーカト申セバ因情ノ為ニ開発ノ異ナルノデアリマス　畢竟スルニ宇宙ノ原子タル非物非心ノ体ハ無限ノ開発性ヲ具ヘテ常ニ開発進化シツヽアリマシテ其間ニハ或物質的ノ性質ヲ顕ハシ或有機的官能ヲ顕ハシ或ハ又精神的作用ヲ顕ハス　又更ニ細説スレバ精神的作用ヲ顕ハス上ニモ多少優劣等ノ不同ガアリ今日児童ノ開発性ノ不同ナルハ此ニ由リタルモノデアリト云フコトニナリマス　愚論ヲ長々シク申上ゲマシテ御耳ヲ汚シマシタ（拍手喝采）